

界の問題になりそうな出土例を、次に紹介しておく。

まず挙ぐべきは、忠清南道大田市槐亭洞出土の遺物群である。銅劍一本、多鈕鏡二面、小銅鐸二口、防牌形銅器一個、円蓋形銅器一個、劍把形銅器三個、磨製石鏃三本、天石玉製飾玉二個、無文土器壺一個、黒陶長頸壺一個(名稱は原文のまま)の各種の遺物が地下につくられた長方形プランの一石室内から出た。防牌形銅器というのは、長楕円を半截した形の銅板で、周縁と中央に幾何学的文様帯があり、基辺に四孔を並べる。劍把形銅器とあるのは、節をもつ割竹形で、鏝をつけ、表面に幾何学的文様をめぐらす。ともに新出の銅器であるが、既知の初期青銅器と共通の趣向を否定できない。これらが、細形銅劍と共存し、黒陶系の土器を伴うという事実は、注目しなければならない。

また慶尙北道大邱市晩村洞出土の一括遺物は、三本の細形銅劍、それらの附属品と見られる劍把金具、鐔金具、鞘金具、のほかに一本の広鋒銅戈を伴う。広鋒銅戈は、その形状や、樋の部分と内に鑄出された文様からも日本製のものであることに疑いな

く、重要な資料となろう。

銅鏃を伴った磨製石劍・磨製石鏃の一括遺物が、慶尙南道金海郡長有面茂溪里から出ている。最初はこれらが、支石墓からの出土例として報告されたのを、国立博物館員が再調査して、遺跡は地下石室であったことを確かめ、本図録に実測図を示して実情を明らかにした。

以上のほか、京畿道の龍仁から重なつたまま発見されたという三枚の銅劍鏃範の如きを含めて、朝鮮における初期金屬文化の貴重な資料が、多数、この図録に収められていて、第二次大戦後における関係資料の増加が、南鮮に限っても目ざましいことがわかる。

(A4版七四頁 韓国ソウル特別市国立博物館刊)

(有光教二)

京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン・パキスタン学術調査報告書(考古学関係)

京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊は、一九五九年から一九六七年に至るまで総じて七回この三カ国に

赴き、考古班・地理班・歴史言語班・人類技術班の四班にわかれて各々の分野で活躍してきた。そのうち考古班は七回とも組織され、とくに仏教時代の遺跡の調査に主眼をおいた。パキスタンでは、カシュミル・スマスト洞窟寺院跡の調査、チャナカ・デリー建造物跡の発掘、メハサンダおよびトリ山上寺院跡の発掘など、アンショカ碑文でその名を知られたガンダーラのシャーパーズ・ガリ村を中心にした地域を調査地域とした。またアフガニスタンでは、ヒンドゥックシュ山脈以北において、ハイバクの石窟寺院跡の調査にはじまり、クンドゥズのバラ・ヒサルやドゥルマン・テペ、チャカラク・テペを発掘した。ヒンドゥックシュ以南では、ジュラバードないしその近郊において、フィル・ハナ石窟寺院、バサーワル石窟寺院などの測量を主とする調査およびストゥーパーの分布調査を行い、ハッダの西南ラルマ村の仏教寺院を発掘した。次に掲げるものはこれらの調査の一部の報告である。

一、『ハイバクとカシュミル・スマスト——アフガニスタンとパキスタンにおける石窟寺院の調査一九六〇』水野清一編 京

都大学 一九六二年刊。第一部 ハイバク石窟(水野清一・西川幸治執筆)、第二部カシュミル・スマスト洞窟(水野清一・西川幸治執筆)、第三部 アフガニスタン北部の考古学的調査(林巳奈夫・佐原真執筆)。

本文一〇七頁、うち英文二三頁。図版グラフィア四八。測図一三。挿図一八〇。

二、『ハザール・スムとフィール・ハーナーアフガニスタンにおける石窟遺跡の調査一九六二年』水野清一編 京都大学 一九六七年刊。第一部 ハザール・スム石窟(水野清一・樋口隆康執筆)、第二部フィール・ハーナ石窟(水野清一・西川幸治執筆)。本文七七頁、うち英文一九頁。図版グラフィア五四。測図一一。挿図三七。

三、『ドゥルマン・テペとラルマールアフガニスタンにおける仏教遺跡の調査一九六三〜一九六五』水野清一編 京都大学 一九六八年刊。第一部 ドゥルマン・テペ(水野清一・小谷仲男執筆)、第二部 ラルマ寺院址(水野清一・藤田国雄執筆)。本文一一二頁、うち英文二〇頁。図版グラフィア四六、測図七。挿図六七。

四、『メハサンダ——パキスタンにおける仏教寺院の調査一九六二—一九六七』水

野清一編 京都大学 一九六九年刊。小谷仲男・西川幸治・水野清一執筆。本文九六頁、うち英文一八頁。図版グラフィア七〇、測図一九。挿図四三。四冊ともB4版。
(桑山正進)

「史林」投稿規定

本誌の投稿規定は次の通りです。

◇資格 本会会員であること。

◇原稿の種類・長さなど。

◇研究論文 四百字詰五〇枚程度(凸版・写真版は特に制限しません)

◇研究ノート 右同

以上には、「要約」と英文要約(又は翻訳用原稿)を添付のこと。

◇資料紹介 四百字詰五〇枚程度まで

◇学界動向 同三〇枚以内

◇批判と反省 右同

◇書評 右同

◇紹介 四百字詰三枚程度

◇送先 「史林」編集委員会宛

◇なお「史林」の論文掲載の順序は、いわゆる巻頭論文制は採用せず、日本史・東洋史・地理学・考古学の専攻順、各専攻の中では時代順・地域順となっています。前もってのお含みおき願います。